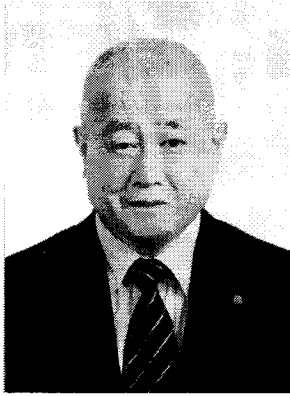


四国遍路の魅力－霊場寺院の立場から－



大日寺住職・四国大学教授
真鍋俊照

はじめに

ただ今ご紹介いただきました真鍋でございます。

私が約30年勤務しておりました横浜の神奈川県立金沢文庫というところは、日本では屈指の文化財の宝庫でございます。国立の三館、東京・奈良・京都を凌ぐ大量の文化財を持っています。総数は約4万5千点、そのうち、国宝が22点。それから重要文化財が約1万4千点を所有しております。

次に四国霊場との関係ですが、私の祖父が第4番札所大日寺に来て、私が3代目なのですが、父が戦後以来非常に長く寺におりまして、私は勉強と仏画制作のため寺の外（東京）で暮らしておりました。そのため父が十二年ほど前になくなりまして、帰山したわけでございます。

四国遍路と信仰

昭和30年代の頃、札所というのは今のようにこんな華やかな場所ではありませんでした。食べるのにも非常に大変でした。その頃は、今では皆さん想像がつかないと思いますが、乞食の人がすごく多かったですし、それに何よりも私が小さい頃の記憶として残っているのは、道端にいわゆるハンセン病の患者さんたちもたくさんおられたのです。今ではその面影はまったくありませんが、その当時は生活がほとんどできない人々が、遍路道を寝場所にしているという悲惨な状況でした。

私はそこでいつも思い出すんですけども、私が丁度高校の夏休みでしたね、高野山からお寺に帰るんですけども、その時にも今言いましたような悲惨な状況がまだ続いていまして、その中に、まあ何人も思い出があるんですけども、特に親子の方がいっしょに連れ立ってくるんですね。そのうちの一組でしたが、一体、この寺院にハンセン病の人たちはどうしてここを離れないのだろうかと思うくらい、何度も来られた方がいました。

そのうちの3回くらい続けて来られた、お父さんは年のころ40前後だったと思いますが、遅く子どもさんが生まれたようでして、小さい男の子と女の子でした。夕方に着かれまして、私はいつもそういう方々には、おじいさんから言い渡されていまして、とにかく井戸で汲んだお水をまず差し上げなさいと。まあ薬缶ですけども、この容器は今なおきれいに使っているんですけども。薬師堂というところがありまして、これは当時土間の床でした。そこにお通しするわけです。

なぜ寺院がそういう方々を受け入れていたのか、これは通夜堂とか色々歴史はございますけども、それよりも何よりも、その当時、昭和三十年代ですけども、もちろんそれ以前から、そういう病の方々は民家では泊めていただこうにもできないわけですね。まだやっぱり伝染するということが四国中の人々の頭に染み

付いていましたので。そういう事が染み付いているところですから、病気をおそれて彼等は石を投げられたり、色々な危害を加えられるわけですね。でも霊場寺院の住職の、一部の方はそうでもないようでした。特に私のお寺は代々それを受け入れるということを知りておりました。おじいさんは特にそういうことに関して非常に誠意のある人でして、それでその日もいつもの場所にご案内したわけです。彼等の風貌はと言うと、ご存知かもしれませんが、顔など包帯をぐるぐる巻きにしておりまして、ハンセン病というのは頭をかくすことと顔の傷口から出血するわけです。それが止まらないんですね。ですから包帯の間から血が染み出るんです。染み出てきて、こするもんですから手にそれが着きます。そうするとそこからまた膿んでくるんです。そういう状況でして、可哀相な様子で、この病はなかなかそれを回避する余地というのが医学的にもまだありませんでした。

私はお堂へお水を持って行って大きなコップにいっぱい入れてあげたわけです。堂内は土間で、そこに薄い煎餅布団が敷かれていました。泊まるのはそこです。それが終わると彼等が帰るたびに天日に干しまして、その上に蕙を敷いておきました。なぜ蕙なのかということが私は小さい頃から疑問だったんですけども、蕙ですと、そういう血液とかが付着してもお湯で洗って干せばある程度それを二回三回と使えるわけですね。ところが布団ですとなかなかそうはいかないということで。裏の倉庫に山積みになっていた布団がそれまでかなりありました。それを定期的に消毒してもらうんです。でも、なかなかそれも追いつかない、それくらい大量の布団が積んであったんです。

それでその子どもさんが夕方、夏前ですけどもまだ明るかったんですが、それでお水を差し上げるとなんだかホッとしたような顔をしたんですね。だけどその人たちはじっと大師堂の方ばかり見て手を合わせていたんですね。私はその時にその光景をいつも見ていまして、拝んでも病気が治るわけではない、手を合わせてもそれが絶対治るわけではないのにと感じておりました。しかしその子どもさんたちはそういう風に教わっているんですね、ご両親から。奥さんはすでに亡くなられたそうですが、実に元気なものでした。

それで私がお水を持って行ってごくごく飲んでもらって、いつも嬉しいなと思うんですが、それも後々思うと、食べるものというのはほとんどもう途中で頂いたお水のみ。それが終わると十一時くらいになりますかね、また大師堂の方に向かってじっと手を合わせていました。お父さんもそうでした。ですから親子二人でそういう状態が一晚続くわけです。私は台所にもどって、梅干を入れこんだおにぎりを四つ作って、差しあげたのです。お父さんは手を合わせてお礼をのべ大事そうにおにぎりを布袋に入れました。おじいさんに言われて、夜中の二時三時に起きて見にいってみますと、それでもなお手を合わせていました。子どもはこくりこくりしながら。大師堂というのは、うちはちょうど薬師堂の正面ですから、ちょうど対面するような形です。ですからお大師さんはその薬師堂の方を向いているわけです。それに手を合わせていたんですね。まあ理屈はきちんと合っています。ただそういう子どもさんたちは、おそらく包帯をとったら多分元気だろうと思うんですが、そういう元気な姿がやはり霊場寺院に本当に真剣に拝んでお願いするという、その大師信仰の奥深さをしみじみと感じました。

そういうことが小さい頃の思い出としてあります。今日の話はそれに端を発して、霊場寺院に対して私がおその子どもさんを通じて一番強く感じた事は、一体何であったかということです。そしてその子どもさんたちがなぜこのお大師さんにすがることか。私たちはすぐ現世利益と行って、効き目があるんだろうかということを考えてしまいます。まあ先ほど効き目がないということをお断言してしまいましたが、私の判断は間違いです。むしろ子供さんには、それ以上の信念がすでにあり、病気はなおると信じ込んでいるということです。自分自身が住職であり、僧侶であり、霊場のことを考える一人であればあるほど、本当は信仰というものは色んな観点でそれぞれの思いの中の奥底に誰でも存在しているのです。それを見つけ出すのが非常に難しいのかもしれませんが。しかし、最近色々考えるんですけども、お大師さん、弘法大師空海というのはで

すね、色々な観点でそれだけの強い信仰に支えられている人々をこうして歩かせるのです。私が言いたいのは、なぜその子どもさんが、親に言われたからといって静かに大師堂に手を合わせていたのかということですね。これはやはりお大師さんの中に、そういう精神的にも肉体的にも治癒する力があるということだと思います。またそう信じているからこそ親子は一晩中大師堂に手を合わせていたんでしょう。それについて本心は否定する考えはないんですけども、その時そういう風に言ってしまったんですよ、「それは治るわけがない」と。それからしばらくして、1回とさらに一年後に神恵院（第68番）近所の方が手紙を下さいまして、讃岐の入口で亡くなりましたという報告を頂きました。四番さんに色々お世話になったので、という言葉が副えられていたそうです。その葉書を受け取って、私はなんとか供養してあげたいという思いにかられました。それから一週間の連日ご供養のため拜んだんです。でも今日では、そんな切実な経験はなくなりました。世の中が「癒す」と方向を向いているのですから。

吉野、熊野から四国の辺地へ

ところで四国遍路の歴史と信仰というのは、尽きるところ、色々な考えがあろうかと思いますが、弘法大師空海は717年に善無畏が中国の西明寺菩提院で翻訳した虚空蔵求聞持（こくうぞうぐもんじ）法を請来し実践完成して、「自然智（じねんち）」を得たと言われています。結局自然を跋涉していきますと、そういう考えが行者の間に発生し、そこに自然智が浮上する。これは今でもおそらく変わらないと思います。そして遍路というのは、そういうシステム構築の中で、あるいは信仰の教義的なもの、それは我々が学問的に裏付けているに過ぎないんです。そういう自然智というものがそこには携わっており、僧侶の側からもシステムがきちんと整えられていったということです。

吉野と熊野の修験道はもともとそれぞれ七世紀末までに独立して誕生しました。まず吉野はそれまで古くから歴史に登場し、『日本書紀』に記述がある。また、元興寺僧神叡は吉野で求聞持によって自然智を得たと伝えられています。

やがて南海道の駅路がひらかれ、その前後に熊野が「神武東征」など数々の神話を持つ「神秘の国」として都人に認識されるようになり、人々が訪れるようになった。歴史に名前があがっている者の一人として、「南菩薩」として仰がれる永興（えいこう）禅師がいます。この人は熊野の住民を呪力で治療し、後には宮中に参上し、内供奉（ないぐぶ）十禅師に選ばれました。

その他に、吉野や熊野から、他の行者に踏まれていない清浄な地を求めて四国に渡った、寂仙（じゃくせん）や、芳元（ほうげん）といったお坊さんがいます。この芳元さんというのはあまり知られていませんけども、石槌山に行くと熊野権現というのがございまして、その社を勧請したお坊さんです。ちょうどこの人が、八世紀～九世紀の初めくらいですから、弘法大師とほぼ同じ時代の人であると言えます。そういう自然智というものが基礎的にそういう人たちの間で認知されて、修行によりいわゆる自然と合体し、一体化しようとしていた人たちがいたんだということです。今では遍路上で修験をやっている方は少ないんですけども、その境地を極めるということになりますと、もちろん熊野の寺とか色々な苦行が今だに残っておりますけども、なかなかそこまで高まって達成されたという方もいないと思います。かろうじて言えるのは比叡山などの回峰行を達成された方々は、そういうものが含まれると思います。

四国霊場御開創説と御入定後の信仰

またその自然環境とこの四国の舞台というのを見てみますと、弘法大師との繋がり、特にその親族的な繋がりというのが強くあるということが分かります。このことを弘法大師の信仰と実際の活動の中に求められます。今申しましたような山野を跋涉し、自然智を取得するというようなそういう超人間的な能力の取得

というものがどこから来るかということです。これは空海自身もこれは認めていますけども、やはりそれまであった神の存在ですね、神道との関係を重視しなければなりません。その中で高野山に弘法大師が入定（にゅうじょう）する際に「定身（じょうしん）して、それを高野の樹下にとどめ、魂を都卒（とそつ）の雲上にあそばしめ、所々の遺跡を検知して、日々の影向（ようごう）を思いえがく」というように言っています。

これは『御遺告』（ごゆいごう）の一節で、八三五年に著されたものなのですが、この『御遺告』という言葉そのものが中世にかなり書写・造成されて、また色々な弘法大師信仰が重なって、話が美化されていきます。そういう危険性はありましたけれども、とにかくこの神との関係（「両部神道」）というものを一つの前提にしているということが中世の真言密教の信仰の特色です。その中で神仏習合の力が巨視化してゆく運命を背負うことになるのです。と同時に大師の入定信仰を大きく増幅させた要因にもなったのです。

そして「影向（ようごう）」という言葉、これはよく聞くことでございますが、これは神が上から、天から降りて来るということです。神というのは上から、天から下りて来て、そして由緒あるところに留まる、そしていわゆる神の姿を現す。それと以前から地上にあった地主神が密教と結びついて再考される。という二つの考え方があります。今の宗教学・仏教学の考え方からいきますと両方なんですけれども、まあ私はよく「影向」というと上から降りて来るということがよく言われるんですけども、それにしても、由緒ある地から表出するというのも忘れてはならないと思います。密教の考え方からしますと、そういうことで神仏習合だという風に言われるんだということです。

それからこの密教の信仰の中には、鎌倉時代の説話集に無住が書いた『沙石集』10巻という仏教説話集がございます。この『沙石集』の中に、「（大師が入唐から帰朝の所に明州の浜から投げた）五鉢（ごこ）は東寺に止まり。三鉢（さんこ）は高野山に止まり、独鉢（とっこ）は土佐国（四国）にとどまりて——（ここが）三密修行の霊地……」、こういう文章がございます。これに関連して今まであまり指摘されたことがないことなんですけども、京都の三弘法（さんこうぼう）詣りと四国遍路の発端、これを見ておきますと、空性法親王が始めたという最初の四国遍路のあり方を注目して見てみますと、一つは下鴨の神光院。それから二つ目は東寺の御影堂。それから三番目は双が丘（ならびがおか）の御室（おむろ）、すなわち仁和寺。これを今でも東寺を中心にして「三弘法遍路」といいます。昭和の初めまで行われていたようですが、三つの弘法さんを祀った所を拝んでからお遍路に出るという習わしでした。それを率先しておこなったのが空性法親王（但し、行状は、総てが必ずしも正確に伝承されているとは限らない）なんですけども。ですから今でも東寺では四国遍路の厄除けのお札を御影堂で出しております。そういうことを踏まえて、高野山と東寺では遍路に対して出発点と終着点明確でした。

しかしいづれも弘法大師を慕って、同行二人ということをつまえて出て行くわけですしお礼まいりもする、それは身体が弘法大師信仰に従って出て行くわけです。その際に、よく我々お坊さんの方では「身（しん）・口（く）・意（い）」の三密と言いまして、「身」というのは体ですね。「口」というのは口、真言を唱える。分かりやすく言うと、「南無大師遍照金剛」というご宝号を唱えて大師堂を拝みます。それは口＝言葉＝真言を表している。それから「意」というのは心です。心というのは、お大師さんを信仰する強い信念＝想いを持つということです。こういう身口意の三密というのを基本にすえて修行の道場で行う実践するというのが中世らしいの四国遍路の目的というように考えられていたわけです。

弘法大師と修験道の伝統

それからもう一つ、弘法大師と修験道の密接な関係を考えなければなりません。とくに近世以降、本山派と当山派の展開が四国遍路を支えておりました。大師のお弟子さんには真雅（大師の実弟）さんだとか実慧

(じちえ)さんだとか智泉(ちせん。大師の甥)さんだとか泰範(たいはん)さんだとか道雄(どうゆう)さんだとか、全部四国の出身者なんですね。四国の出身者が大変多いということです。そういうことも四国遍路の形成に、何らかの力が働いていたのではないかとということが想像されます。まあそんなようなことで、この四国遍路というのは非常に古い時代から、弘法大師と十人のお弟子との関係で盛んになるという状況が考えられます。最近、第八番熊谷寺大師堂でこの十大弟子画像が発見されました。

(以下映像音声)

四国遍路の一つの信仰のかたちは発心に始まり、修行・菩提を経て涅槃へと到るお遍路の旅。自然界の流れの中を、ゆっくりと刻むように進む。八十八ヶ所の霊場を辿る、1400kmの旅は、弘法大師に近づき、その心を感じる道のりなのです。

四国と淡路島の間に、渦潮で有名な鳴門海峡があります。橋がかかる以前、四国八十八ヶ所お遍路の旅は、その渦を巻く波を乗り越え、鳴門の港に舟が着く所から始まりました。お遍路さんに乗せた舟は、途中淡路島に立寄った後、入江に接岸します。鳴門市の中心地区で、かつて撫養港(むやこう)と呼ばれていた場所です。その船着場が今でも残っています。あちこちからやってきたお遍路さんたちが、その第一歩を記した場所です。さぞかし胸の中は、これからの旅を思い、期待と不安でいっぱいだったことでしょう。

撫養の港で陸に足を踏み出したお遍路さんは、最初の札所を目指し、街道を西に進みます。その途中には、明治時代に立てられた道しるべがあります。そこには「四国遍路街道これより一里三町」と、一番札所霊山寺(りょうぜんじ)までの距離が記されていました。今の単位でいうと、4kmちょっと。およそ一時間歩いて、お遍路さんは一番霊山寺に辿り着いていたことでしょう。

八十八ヶ所を目指す、今のお遍路さんのほとんどは、電車や車を取り継いで四国にやって来ます。そんなお遍路さんたちの出発点となるお寺が、霊山寺です。天平年間に創建。弘法大師によって一番札所に定められたこのお寺、山号は竺和山(じくわざん)といいます。その由来は、かつて弘法大師がこの地で修法を行った際、多くの菩薩が一人の老師の法話に聞き入る光景が目に浮かびます。その姿がインドの靈鷲山(りょうじゆせん)で説法をする釈迦の姿に似ていたことから、ここが和国日本の天竺インドとなることを願い、山号を竺和山と名づけられたそうです。

そんな弘法大師の願いが込められた一番札所霊山寺は、発願の寺と呼ばれています。本堂に安置されているご本尊は釈迦如来。秘仏ですが、お釈迦さんの誕生日の四月八日だけ、一般に公開されるそうです。

本堂の脇では、発願の寺にふさわしく、お遍路の衣裳や金剛杖、納経帳などが販売されています。お遍路さんはここで身支度を整え、四国八十八ヶ所の霊場を廻る旅をします。

このお寺では遍路作法の指導もしてくれます。ろうそくと線香はこれからの旅に欠かせないもので、お参りの時に必ず一本のろうそくと三本の線香を上げます。お参りの時に上げるお経が、般若心経です。一番札所では初めてでまだお経に慣れていない若者たちも、八十八番を迎える頃にはすっかり板についていることでしょう。

「(心経については)一言一句間違えないようにいつも経文を開いて、読んでいただければいいわけです。ゆっくりしないでも三分半か四分あったら終わるんですから。そう焦らずに。せつかくの時間を費やすんですから、お祈りの時間はマナーに従って、訪問をして生きた先輩にでも、あるいは会社の上司にでもご挨拶に来た、そんなおつもりで、接していただければ。まあ間違いはないと思いますね」(吉村住職)

一番札所の霊山寺からおよそ1km。朱色の鮮やかな仁王門が特徴のお寺が、二番札所の極楽寺です。四国八十八ヶ所のお寺の多くが、戦国時代の動乱の影響を受けてきました。このお寺も度重なる戦火で消失。万治二年、1659年に現在の本堂が再建されました。

安置されているご本尊は阿弥陀如来。秘仏のため公開されていませんが、その仏像にはこんな言い伝えが残っています。その昔、仏像の発する光が遠くの海まで達し、そのために魚が驚いて逃げてしまいます。不漁続きとなって困り果てた漁師たちは、阿弥陀様をお願いして本堂の前に小山を築き、光をさえぎったと言われています。それが日照山（にっしょうざん）という、極楽寺の山号の由来となったそうです。

お遍路さんたちは本堂でお参りを済ませた後、必ず弘法大師を祀る大師堂に向かい、お経を上げます。八十八ヶ所全てのお寺でこの順序が守られています。

お寺の境内で樹齢千年を越す杉の大木に触れ、何やら願い事をするお遍路さんもいます。言い伝えでは、弘法大師が自ら植えたと言われるこの大木に触ると、長寿が全うでき、触ったその手で体の痛む部分をさするとたちまち治ると言われています。その昔からお遍路は、自然の樹木から力を授かり、長い修行の旅に立ち向かっていったのでしょう。

(以上映像音声)

四国「八十八ヶ所」諸説と見解

今、一番から二番に入るまでをちょっと見ていただきました。これがまあ八十八ヶ所あるわけですね。よくこの八十八ヶ所、「八十八」という数字が、どういうものを根拠にして出来上がったのかと。まあ色々な説があるんですけども、今日はその一部をご紹介します私の考えを述べたいと、こういうように思います。

まあ、俗説ですけどね、日本の人はお米を食べますが、「米」の字を分解すると八十八になります。

それから、よく言われることです。これはまあ二十三番薬王寺さんなんかがとっている説ですが、男の人専用の坂、階段もある。それから女の人専用の坂もある。そこに一円ずつ置いていって、そして上っていく。厄年の男の人は四十二、女の人は三十三。それから子どもの十三を合わせて足して八十八になります。上手くできてますよね。

それから、これはちょっと専門的になりますけれども、『三十五仏名礼儀文（ぶつみょうらいせんもん）』の三十五仏と、それから『観葉王葉上二菩薩経（かんやくおうやくじょうにぼさつきょう）』というお経がございます。ここには三十五仏とそれから五十三仏が説かれていますけれども、これを合わすと八十八になるということです。これはまあ中国でこの二つのお経の仏さんを供えるという風習がございまして、それが日本に伝わって八十八になったと。

それから、これも俗説ですけども、西国の三十三ヶ所と熊野の九十九（つくも）ですね。九十九王子。それから日本廻国六十六部（かいこくろくじゅうろくぶ）というものを合わせまして、古来からの聖なる数である八を重ねて八十八とした。

それから、これが一番まあだんだん近いかなと思うんですが、お釈迦さんの入滅の時にですね、今でも日本から仏跡巡拝でインドに行くことがよくありますけども、八ヶ国に仏さんのお骨を分けて、仏塔が建てられます。これはインドで有名な仏教の信仰者のアショーカ王という人が、非常にそれを奨励しまして、そして広まったんです。これがお大師さんが入唐して中国に留学している折りに、インドから般若三蔵という方が中国に来られた。この人が仏跡巡礼の土を持って来るんですけども、これをまあ貰い受けたということですね。これを十倍して八十、元の数字の八を加えて八十八とした。ですから今でも札所の土を持ち帰られる遍路の方も多いようですね。こんなことに由来しているのかもしれない。

それからお釈迦さんは有名な鹿野苑（ろくやおん）で五人の比丘に「四諦（したい）八正道」の法を説かれた。これをまあ初転法輪（しょてんぽうりん）というんですが、この中に「見惑八十八使（けんわくはちじゅうはっし）」が説かれています。ここに注目した江戸時代の有名な霊場信奉者、真念（しんねん）さんという人がいますが、この真念さんによりますと、有名な著作である『四国徧路功德記（しこくへんろくど

くき)』というものがございます。そしてこの中に「四諦の中に見思の惑(けんしのわく)というあり」と書いてありまして、「この見惑というに八十八使あり、この数をとて、八十八ヶ所と定め」、とこういう説明をされております。これは一言で言うと、八十八、色々我々は煩惱を持っているということですね。これを断滅するというのが、八十八ヶ所を廻ることによって可能にする、そういう信仰ですね。結局自分というものを見つめなおす。そういう、自分探しなどと今日言われていますが、その根底にはこの八十八使の見惑というものが、根拠になっていると思われます。それは仏教学的に色々分析していくと、それからお大師さんの『十住心論(じゅうじゅうしんろん)』という著作でもですね、これは裏付けることができるんですが、まあ宗教学的に見て、これはそう言えるわけなんです。多分に四国遍路をされる方は、よく私もどうして来たのかということをお聞きしますが、それは何かあるんじゃないか、ということをおよくお聞かれます。それは自分自身にそういう煩惱があるということをお、まあ承知して、それを取り除くんだと。そういう、願望が心のどっかにあるんですね。ですからこういう解釈が当てはまるんだらうと思うんですが、これは古くから言われていることとございます。

それで、霊場会としては色々な説明をするんですけども、今ではこの八十八の見惑というのは、もう大方の識者の間では支持されていまして、この真念さんが『四國徧路功德記』で説いているということもありませんね、これを根拠にして説明する住職さん達も大変多くいます。私は、正直に「分からない」という風にお言うんですけども、分からないものは分からないと。だけど、これは廻っている人が一番よくご存知なんですよね。やはりその煩惱、悩み、これを持っているから廻るのかなあと。その証が、回数を重ねるということで、納経帳を見ると真っ赤なんですよね。そうなるおね、我々としては良いともお言えないし悪いともお言えないし、しかし四国霊場の信仰はそれで十分に保たれているとお考えられます。

先ほど最初に言ったそのハンセン病の小さい子どもさんの、一生懸命お拝んでいるという姿をお思い起こしますとですね、やはりその、何とお言いますか、治ると思ったら治るんですね。本当に私おそうお思いますよ。これは住職がああ言ったおこう言ったの問題じゃなくて、もうその人個人の信仰ですから。これはもう絶対的なものですね。最近よく遍路で、これは他の住職はあんまり指摘しないんですけども、私んとこは四番ですからね。大体一番で分からない、二番で疑問を持つ、三番でどうしようか、四番ではお聞きましよう、おこういう仕組みなんです。ですからうちはおこれに答えられるようにマニュアルがお作ってありまして、それでまあ、「始めての方ですね」とおこう話しを始めるわけです。最近ね、最近とお言ってもここ五年くらいからなんですけども、特に女の方で、乳ガンをお宣告された方ね、これ非常に多いんです。だけど何にもお言いません、来た時はね。だから分からないんです。分からないんですけれども、だけど私はある時開眼したんです。本当にこれはもう実話ですけども、もう本当に元氣おそうなんですよ、普通に全然。それでおこう、なにかおまじもじしてまして、なかなか去ろうとしませんよ。納経所をおね。それでたまたままあ私どもの所は二人か三人座るんですが、私は先ほどお紹介いただいたように大学をお兼務しているんで、納経に座ることが多くはないんですが、その若い女の方、まあ23、4だったですかね、「初めてですか、どうして廻ってらっしゃるんですか」とお聞くと、「何となく」と。そこまではいいんですよ。まあ、そうなるお一つお心が通じますよね。そうするとその何で廻っているかおいうところに、ご本人はちょっとお気持ちが止まるわけです。そこにちょっとお思いを留まらせるわけですね。「実は、お医者さんからガンのお宣告をされて、もう三ヶ月の命しかない」とお言うんです。「ええっ」と、最初だったんでびっくりしました。「それでなんでこの八十八ヶ所の遍路に出ることになったの」とお聞くと、「もう会社は辞めたんです」と。東京の方でしたけれどもね。「辞めることもないだらうし、月賦遍路おいうのもあるんですよ」月々休んでおいて、それで区分けをして廻るおいう。最近多いんですよ、おそういうの。まあまだ五年くらい前の話ですから。おしたら何かしゅーんとおしましてね。泣き出したわけね。「もう駄目かもしれない」と。「そんなはずはないからともか

く歩けますから、絶対心配ないから。僕がまた夕方拝みますから」と。それで一緒に拝んだんです。そしてその、私は全然そういう気持ちはなかったんだけど、その女の子はね、ものすごいニコニコしてね。それでその、嘘か本当かわかりませんが、「ともかく生きてます」ってことで出て行ったんです。それからしばらくして、途中で電話をくれましてね、もう下痢がひどくなったと。八坂、ですか。その辺で非常に下痢がひどくなったという電話をもらいまして。それで私はぜひちょっとお医者さんに診てもらいなさいというアドバイスをしたんですが、その方はもう、結局大窪寺まで行かれてね。まあ一ヶ月半くらいかかりましたかね。女の子では、早い方じゃないかと思います。普通早ければ一ヶ月、あるいは四十日ですけども。まあそれでその、結構元気になりましてね、東京に帰られても電話を度々頂いて。会社に復帰して元気にやってるそうですけどもね。この1月の年賀状です。

実はそういう人が今度はたくさんいるのかな、ということですね、住職としてはあるまじき行為なんですけれども、初めての方って何かそういうことがよぎって、女の方を見ると説法という形で声をかけるんですが、そうするとやっぱり五人に一人、十人に一人という形でいらっしゃいますね。それでその方の経験談などを話してあげると、やっぱりすごく共感を持ちまして、歩いてみようということになります。女の方は不思議だなんて思うんですが、男性よりもそういう何か目的意識を実践するという点では、すごいんじゃないかと思います。そんなわけで、そういう隠れたガンを背負いながら歩いている方もいらっしゃいました。

「四重円壇十堺説」と「四転説」

次に、見惑と煩惱の関係を示した仏教書からの区分けがございしますが、これは弘法大師の『十住心論』という書物に、「迷理（めいり）の煩惱を名づけて見惑（見所断けんしょだん）となし、事（じ）に迷うものを名づけて修惑（しゅうわく）修所断（しゅうしょだん）となす」とあり、迷理の煩惱、これが八十八個あって、これを取り除くために廻るんだということを意味付けています。そういうことを色々積み重ねていきますと、四国遍路の修行の道を六道＝地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上といういわゆる輪廻の苦しみから、結局声聞（しょうもん）・縁覚（えんがく）の修行、これを見道（けんどう）と言いますが、これを経て菩薩、それからまあ最終的には十界というあの世の世界というものを乗り越える。そしてその輪廻転生をしてこの世に戻るといふそういう考え方。結局は輪廻転生によってこの自然の世界のどこかに再び生まれ変わるという、そういう落ちつかせ所となっています。これを四転説（してんせつ）と言います。これを唱えた人が荒木戒空さんといって、徳島の明王寺のご住職なんです、『遍路の杖』という名著、これは昭和36年に出されたものですが、それに書かれています。まあ私ども阿波の住職会ではですね、よくこの『遍路の杖』を読む会を持っています。

それからもう一つは、何故この四転説を我々は尊重するのかということ、結局この、四国遍路の指南を目的とした、いわゆるお大師さんの絵図の入った曼荼羅を説いた四国の全図がございしますが、これは江戸時代の時期に非常に細かく描かれた案内書です。こういう案内書というのは、今の大阪の難波ですね。この辺でたくさん刷られまして、これを折りたたんで遍路に出る人に売っていたわけです。徳島などでは、第18番恩山寺に釈迦庵という小さな庵があるんですが、そこで江戸期にたくさん刷られました。ものすごくたくさん刷られました。ところがたくさん刷られた割には残っていないんですね。最近これを色々調査しているんですけども。そしてその時に大体定まった、この修行と遍路というものを組み合わせた考え方が、発心・修行・菩提・涅槃という考え方です。これはこの曼荼羅という絵図に基づいて、それぞれ仏さんを当てるんですが、発心は宝幢（ほうどう）如来、それから二番目の開敷華王（かいふけおう）、阿闍宝生（あしやくほうしょう）如来、それから菩提は無量寿（むりょうじゅ）如来、それから天鼓雷音（てんくらいおん）如

来。この四方に四つの仏さんを当てて、遍路を成就するという仕組みになっております。まあ今この四転説を唱えながら歩む人ってというのは、江戸時代ではありませんからいないんですけども、まあ我々の説明としてはそういうことを申し上げるわけです。

それからこういう印刷物は、今で言う旅行ガイドブックに相当するものですが、真念さんが、江戸時代に出て参ります。真念さんがこの『四國邊路道指南（しこくへんろみちしるべ）』というものを貞享四年に作ります。これが大体基本になって、今日では、『四國徧路功德記』というものと、それからもう一つ『四國徧路靈場記』というものをまとめた。これらが真念さんの著作の「三部書」です。まあ一番最初にできたのが『四國邊路道指南』ですね。これが1687年、貞享四年です。それから二番目が、『四國徧路靈場記』というものです。これが元禄二年ですから1689年。そして最後に『四國徧路功德記』というものが元禄三年、これより少し後ですけどもね、1690年。これをまあ「三部書」、「三部作」といって、今日では遍路研究の名著ということになっています。

四国遍路と世界遺産

私どもは、今、世界遺産ということを主張しながら活動を色々続けているんですが、まあその発端、これはまあ一昨年になりますけども、四県の知事直轄の政策ということを中心にしています。そこで、委員会を作りまして、その中で専門部会の方では先ほどご紹介いただいた本学の内田九州男先生も委員でいらっしゃるわけです。検討するテーマは四国遍路のルートの根拠、そして遍路寺院の八十八ヶ所の境内を中心にどのように保存・管理されているのか。それにはまず本堂、大師堂、それから山門。それと同時に「四国遍路寺院と道」という、いわゆる遍路道というのが世界遺産の大きなテーマです。

今申しましたお寺の本堂、大師堂、山門からずっと続いているいわゆる参詣道です。これも保存してこうということまで今日進めているわけです。今日では世界遺産への登録を目指しているわけです。十年くらいかかるかもしれません。

それからすげ笠によく「迷故三界城（めいごさんかいじょう）、悟故十方空（ごこじゅっぽうくう）、本来無東西（ほんらいむとうざい）、何処有南北（いずこになんぼくあり）」こういう文句が墨書きで書かれています。これらの意味は「人は迷うが故に諸々のことに苦しむ。けれど悟りを得れば何処にしようとも浄土である。自分の我執（がしゅう）を離れば、心は平静になる。」という意味です。自分で我執を離れるということが、廻っただけで悟れば、もう何の問題もない。何の問題もないんですけども、ますますその問題が深まる人がいるんです。それが執着なんです。そして、その結果がああ、いわゆる納経帳が真っ赤という認知です。もうどんどんどんエスカレートするんです。これは悪いことではないんです。それだけ信仰が充実してのめり込んでいるんですからね。だからそれはいいんですけども、よく奥さんなんかの声を聞くんです。後から廻ってきた奥さんがいるんですけどもね、「もううちの人は出たっきり帰ってこない」と。それくらいのめりこむんです。それで離婚沙汰になったりしてね。一種の出家ですね。お大師さんはあまりそういうことを求めていないだろうと思うんですが。そういうことが現実に色々あります。それから非常に多いのが人探しですね。迷子になるということなんですけども、とにかく行方不明者の報告がたくさんきます。だけどもとも四国遍路というのは死出の旅なんです。ここ四国の地を死出の住みかとして昔の人は心得ていたわけです。ところが今は死というものはさておいて、生きる喜びということにすり変わっているんですね。これはもう、大変すばらしいことだと私は思います。おそらくハンセン病の小さい子どもさんが教えてくれた行為なども、今私の頭の上をよぎるんですけども、それは多分これから廻る人は何とか元気に生き延びてほしいという、そういう願いが、そういう人たちの積み重ねによって今日あるんだろうと思います。ですからそれをお話することによってどういう効果があるのか、それは分

かりませんけれども、私などはいつも勤行をしながら、そういう人たちの礎があってこういう信仰が未だに続いているんだなというように思うわけです。

四国遍路と回遊

それから最後に、実は今日はこのことを中心にお話ししようと参ったんですけれども、実は八十八ヶ所のお寺があります、お寺の中には住職がそれぞれ、大概一人います。お寺の側では毎朝勤行というのを行います。六時になったら梵鐘を打つということで、八十八ヶ所全部にこの六時の鐘が常備されています。ただこれは、古いものは意外と少なく、戦争中にほとんど消失してしまいました。しかしこの終戦直後ですね、それを全部直すということが霊場会の大きな仕事でして、これを直しました。もちろん昔からあるものはそのままです。ですから八十八ヶ所の梵鐘というものが完備されているというのはもう事実でございます。それはとりもなおさずお寺の中で勤行を必ず行うということです。

以下で述べますのは、遍路者のカリキュラムなんです。最初に祈願文がありまして、必ずこのご本尊に対して色々なことを祈願する。これはもう当然のことですね。それからその際にお経を読むわけですが、これはまあ般若心経ですが、開経の言葉というものを偈文（げもん）で読みます。これは仏法にちゃんと遭う喜びを、自分でもそこで述べるわけですね。一つの宣誓の言葉と言っていていいと思います。これをまあ「開経の偈」というふうに言っています。

それから当然のことですが、八十八ヶ所を廻るということは懺悔をするということなんですね。その懺悔も、浄土の場合は、これはまあ私の解釈にすぎませんけれども、この懺悔は直線的なんですね。ですから世界遺産でもよく問題になるんです、外国の場合ね。マリアやイエスは我々の目線から見て上の方にあるから上から下へ一直線になる。それに懺悔の言葉を入れて拝むわけです。だから自分の心の中でひれ伏すわけです。ですが遍路の場合はそうではないんです。それは本尊だとかあるいはお大師さんだとか、そういう礼拝対象に向かってひれ伏すということはあるんですが、もう少し永続的です。単発の信仰、祈念を巡礼して自ずから組みたてていくわけです。

また、さらに大事なことは、そういう本尊、お大師さんというものを廻り廻って祈念するのですが、右回りに右遷をしていくという、これが非常に重要なことなんですね。これは世界には、この四国霊場しかないんです。右回りの廻遊というものは、全部、世界遺産でも、それから色々なところにある祈りの場というのはですね、一直線で一方通行。だから行ったらそこから戻ってくるということなんです。それではなくて、この四国霊場というのは、発心・修行・菩提・涅槃というこういう修行階程の中で、四つの廻国をしていくわけです。歴史的にそのモデルは三十三ヶ所の巡礼、観音信仰の巡礼に根っこがあるわけです。その根っここのモデルが実際に江戸時代に、私の自坊にも納められ『大日寺三十三観音像』があります。大坂の堺の裕福な商人たちの明和年間（18世紀中頃）の奉納です。

つまりその礼拝対象は、江戸時代の三十三ヶ所のモデルが基盤になっているわけです。三十三ヶ所の霊場というのは、観音さんですから慈悲を頂くわけですね。ですから慈悲というのは必ず懺悔を中心にして罪・穢れ、そういうものをまず全部取り除いて、それから本格的な信仰をしたと、こういう仕組みです。ところがこの八十八ヶ所の信仰というのは、先ほどから言っているこの見惑を断絶するわけです。この断絶する、取り除くというのは、もう手術と一緒にできませんね。部分的に取り去っても、ガンなどではまだ他にある、という心配があるわけですね。それを取り除くということになると、全部体を破壊していかなくてはならない、そういうことになりますね。それでは駄目なんです。それを自分の信仰の中で、自分自身の力で、よしんばそれが不可能で、死んでしまっても、必ずそれはあとで縁者、存続、色々な繋がりを通じて、その命というのは受け継がれていくわけです。で、その最終的なものというのはやっぱり自然なんです。

自然の草だとか木だとか、こういうものに受け継がれている。ですから古代において、遍路は修験の精神が育んだ一面が濃厚にあるのです。こういうことになるんですね。ですから「自然智」という。最近ではロータリークラブのボランティアの方も、日本の中で四国の霊場の周辺にやっぱり自然を絶やさないようにということで、一本一本神木を植えていこう、香木を植えていこうと、そういう運動も最近培われています。流行って参りました。私どもはそれを支持して奨励しているんですけども。

それから、遍路のこの回路回遊という考え方はですね、世界平和にも貢献する非常に重要な理論を持っていると思います。日本は単一民族の集合であります。多民族の国家体制ではありません。それを基盤にした宗教行為に、他を害するような狂気づいたものは全くありません。全部受け入れています。共存しています。むしろこの身体の中に、中へ中へ入っていくような、いわゆる自分の心のありかを探るといこういうシステムは、自然の中で自然に構築することによって可能になる、こういう考え方ですね。これは弘法大師空海の菩提廻遊という考え方なんです、空海のいろんな書物の中にもそれは明記されています。

つまり右遷であるというのが非常に大事です。で、この右遷というのはですね、やがてこれは光を求めるとい行為に発展していきます。今日では科学的に、その光というのは閃光性と言いまして、ある場所に行くと祈りを捧げると、そういう思ってもない光が発せられると。これは光学活性というふうに理科系の解釈では言うそうです。一つだけ、古代からそれを達成した良い例をご紹介したい。それはよく、鎌倉時代以降に、この弘法大師信仰というのが確立して以降、いわゆる仏像の白毫、額の一点から光を出しますよね、これは仏像の三十二相と言って、三十二の優れた特徴、それから八十の優れた性質、これを表現したものが白毫（びやくごう）の光になりますが、これは鎌倉時代になりますと水晶を入れたんです。水晶と言うものは、ガラスとは違いまして、自然の原石です。この自然の原石と言いますのは、今申しました右廻の閃光性と呼ばれる力というものを掘り下げている。ですから、我々は見惑という、色々な悩みというものを持っていますが、それはお大師さんなどに手を合わせて拜むことによって、その右廻の閃光性というものが仏さんの側から発光してくるんです。それを受け止められるかどうかというのが遍路修行者、遍路の行為にとって非常に重要なんです。つまり、水晶でなくても水晶だと感じれば、その効果が得られるということです。で、先ほどから秘仏と申し上げておりますが、秘仏の多くは全部水晶がはめこまれています。これはもう、私のところも実は秘仏って開けてみないとわからないんですけども、多分水晶がはめこまれていると思います。それは江戸時代までの人がそういうことを知っていたからですね。つまり見惑という、そういう煩惱はですね、仏の力でえぐられることによって解消するわけですね。そういう解消するというシステムは、水晶が最も有効なんです。で、まあ私は仏像を研究するので、特にそういうことを申し上げておきたいと思っておりますけれども、実際に右遷であるという行為と、水晶が仏の白毫であるということです。

それから、先ほどからちょっと申し上げておりますけども、弘法大師空海は若い時に、虚空蔵菩薩（こくうぞうぼさつ）の真言、これを百万遍唱えて、苦行を乗り越えて、実際に達成したと言われておりますが、「こくうぞう」という言葉はですね、これは空海というのは、つまり讃岐という土地にですね、佐伯直田公（さえきのあたいたのきみ）、これが初代ですけども、それから虚空蔵菩薩の真言というのは、これは語呂合わせになってしまうんですけども、ちょうどこの虚空蔵菩薩というのは胎蔵界の曼荼羅の大日如来の丁度真下にあるんですね。それで発光するわけです。そういうことからですね、お大師さんの光はどこから発せられるかということ、やはりこの白毫から発せられるんですが、これは善通寺に秘仏で目引き大師というのがあります。これは室町時代に出来上がったもので、最近というか去年一昨年公開されました秘仏ですね。その目引き大師というのは、普通のお大師さんの像があって、その背後からお釈迦さんがいわゆる五岳山を乗り越えて、雲の上からですね、お大師さんの眉間を照らすわけです。で、眉間なんです正面からではなく頭の背後から照らすんですね。それをお大師さんが活性化させて、万人を救うようにそっからまた

白毫の光を出す、こういう絵があるんです。これは秘仏なんです。秘仏なんですけれども、普通寺にあります。そういうことを実際に再発掘した人がいるんです。これがあの、高野山に長くいて、後にこの四国の地に流刑になりましたお坊さんです。で、この流刑になったお坊さんが虚空蔵菩薩の真言を百万遍お大師さんに拜んで一生懸命苦行したんですね。その苦行の真言は「のうぼうあきしゃ きゃらわや おん あぼきしゃ まいおりそわか」。これを百万遍唱えた。50日間。一生唱えるのではなくて、50日間と限定したわけです。ということはですね、これは一日に換算すると、もう飲まず食わずでやらないと50日では達成できない。その日を超えちゃうとその苦行はアウトですから。で、このご真言の意味は何かと言いますと、「虚空蔵菩薩へ苦行します、お祈りをします。花飾りをつけた人、蓮華の冠をつけた人、これらの人に幸いあれ、そわか」とこういう意味ですね。だから虚空蔵というのはですね、空海がその家系だとすれば、そういう一族に幸いありなさいということが、この虚空蔵菩薩の真言に含まれているので、奇妙にも一致したということですね。空海は恐らくこのことを知っていたと思います。

四国遍路と曼荼羅

まあそんなことが色々ありまして、最後にもう一つだけ申し上げておきたいんですけれども、じゃあ一体この、寺院の側から色んな祈りを込めて毎日勤行をして、遍路に来る人にも祈りを捧げて、遍路者の方からも色々な勤行を、これを相感する、交感するという形を取っていますね。この相感するような場合には、私はいつも感心するんですが、心経会というのがございます。これは有名なお遍路さんの団体です。未だにそれは行われておりまして、その滋賀心経会はですね、もう赤ちゃんが生まれてもお母さんは歩く。それで子どもでも。ただその滋賀心経会の祈りの特徴というのは、必ず、本堂、大師堂でも、上には上がりません。つまり、地上の上で土下座をして祈るんです。それを見るたびに、ああすごいなあと。これは創始者の、滋賀心経会を開いた人の遺訓なんですけど、そういうふうにして拜んでいます。

で、その解釈なんですけれども、弘法大師の著作の中に『即身成仏義』というのがあります。この『即身成仏義』の有名な言葉に、「六大無碍（むげ）にして常に瑜伽（ゆが）あり 四種曼荼（まんだ）各離れず 三密加持すれば速疾（そくしつ）に顕わる」という文句がありますけれども、祈りというのは、一方的に祈って相手の人に対すれば、その答はすぐには帰って来ないんです。すぐ帰ってきたらこれ、おかしいですよ。だけどそれを相手の方が受け止めて、何日も何日もかけて、あるいは何年も何年もかけて、それが色々な形で表れてくる。まあ中には聞いたとか聞かないとかそういうことになってくると思いますが、まあこの即身成仏の極意はですね、六大無碍にして、この六大というのは地・水・火・風・空という五つのこの世を構成する元素を言います。ところが弘法大師は、これは五大なので、これに識という字を加えたんです。意識の識ですね。つまり、この宇宙というのはですね、自然にしろ何にしろ、それから皆さんにしろ全部、人間には気持ちがあるし、それから血の通った生身の体、これには精神がある。これは全部、ひとりひとり違うわけですね。同じものというのは全くないです。これからどんなに子どもさんが生まれ、生命が誕生しても、これ絶対に一緒じゃないんですね。この全く違うという構造の連続性、これがまあ生命なんですけども、そういうものは必ず、人間だけでなく動物にも植物にも、岩石にも、土地にも泥にも、全てのものにあるんです。そういうことを考えると、この即身成仏義の「六大無碍にして」というのは「瑜伽である」と、こう言っているんですが、瑜伽というのは、お互いが関係しあっているということです。つまり関係しあっている事が、存在しているということなんですね。だから我々はよく、末期になって寂しいとか、独りでは生きていけないとかいう解釈が出てくるわけなんです。今介護というものが大きな話題となっていて大きなテーマですけども、これの根本はやっぱりお大師さんが言った六大という仕組みの中で、実際にこの瑜伽の、瑜伽というのはこれ「ヨーガ」ということです。色々体を動かしてね、

ヨーガをする、あれと一緒に、インドではこれは瞑想と言います。そういうものには必ず四つの曼荼羅がそれぞれついている。我々の体には、八十八の煩惱があるけれども、同時にそれを乗り越えるだけの力が備わっている。曼荼羅の「曼荼」が備わっている。「曼荼」という「曼」は「本質」、「荼」というのが「有するもの」、つまり「本質を有するもの」。だから皆さん本質を持っているわけですね。だけど色々なことで全部それは覆い隠されてしまって見えないだけなんです。そういたしますと、この本質の中に曼荼羅があるんですけれども、その曼荼羅の仏さんに今度変えて考えますと、胎藏界には410くらいの仏さんが書かれています、全部それが動くんです、動くように描かれています。私は仏画を描きますからね、曼荼羅を描いていまして、描いて入る時にそれが分かったんですね。同じような仏さん、皆さんも恐らく八十八ヶ所行くと、お不動さんもいるけれどもお不動さんでも似たようなお不動さんたくさんあるでしょ？それから阿弥陀さんって言うてもお釈迦さんと一緒じゃないかと。あるいはもっとひどいものになると、お薬師さんとお釈迦さんってどう違うのかと。ただ手に薬壺持っているのがお薬師さんだというだけでね、薬壺を取っちゃうとお釈迦さんと区別がつかなくなっちゃうんですね。ということは、これは全部、お釈迦さんというのは人がモデルなんです。人間がモデルになっているから、ある程度までは理解が行き着くんですけれども、そこから先がわかんない。そこから先は何かと言いますと、仏さんというのは全部動くんです。組み合わせていって動くんです。つまり410ある、410尊描かれていますけれども、それを全部一枚一枚この、静止画像をですね、引っ張り出しまして、それを縦にずっと並べると。そうすると坐像ですから座っているんですけれども、動きが全部繋がっているんです。あるいは首を振ったり、目を動かしたり、そういうふうに住組まれているんです。ただそれが分からないように、曼荼羅、ありゃ難しい絵だなあということで描かれているだけなんです。全部それを取り出してもう一度整理し直しますと、動くんです。

つまり何が言いたいと言いますと、見惑いというのはですね、八十八の色々な煩惱というものが人間にはあって、その煩惱というものに執着をするから、それで分からないだけなんです。それをもう一回全部整理し直しますと、動くということが分かる。動きますと、意外と解釈、理解することが簡単なんです。ですから動いているということが分かると、我々は安心するんです。ですから人生というのはですね、一つの安心感なんです。動いているということをいかに実感するかということが、最も大切なことなんです。

「ああ、じゃあそれは生きていくということですね」、ということになるわけですが、「まあそうです」というふうに言いたいんですが、それだけでは済みません。もっともっと我々はそれ以上の、動き出したものはもう一遍、それは色んな慈愛を持って色んな考えを持って、色んな人が色々関わっている。そしてその人を色々助けていってあげたいし、それから理解してあげたい。そういう理解の気持ちを注ぐだけでもですね、その動くということを保証することになるんです。遍路者と我々お坊さんというのはですね、それをいかにドッキングさせるかということで一生懸命になっているんだと思います。よく「これは病気に効きます？」と「このお薬師さんは効きます？」と効かれるんですけれども、私はもう「効きます」ということを申し上げるんですけれども、まあそういうことをおっしゃる方はですね、恐らくお薬師さんが動いてくれれば納得してくれるのではないかと。それくらい、その曼荼羅というのは難しい絵ですけれども、意味があるんですね。

それからもう一つその曼荼羅にはですね、彩色の曼荼羅だけではなくて、金と銀で描かれた弘法大師の高雄曼荼羅（紫綾地金銀泥曼荼羅）と言うものが国宝で残っています。それは紫の綾地にですね、金と銀で輪郭線が描かれた仏さんの集合なんですけれども、それは約4m四方くらいの本紙が二幅ありまして、それ自体を見ているとそんなに驚かないんですけども、それをかけて真っ暗にするんですね。で、実は江戸時代の写しがありましてね、その写しの前にろうそくを一本だけ立てるんです。それで真っ暗になるまで、夜中まで待つんですね。それで御堂の中が真っ暗になりますと、その金と銀の輪郭線がですね、本当にろうそ

くの光で輝いて、うっすらと、410尊の仏さんがふわ〜っと空中に浮いて見えるんですね。それをおそらく弘法大師空海は、近郊の人、それから右廻をする人に見せていたんですね。それが今国宝で残っている、京都の神護寺でそれを行ったと考えられておりますけれども、その神護寺に『灌頂歴名』という国宝の記録が残っています。そしてその記録の中には最澄さんの名前もあります。空海自筆の署名がございます。その前でかけられた曼荼羅というのは実は彩色の曼荼羅なんですけれども、恐らく彩色の曼荼羅は真っ暗にすると何も見えないですね。だけどその金銀の線で描かれた曼荼羅は、じっと見ていると仏さんが浮いて見えるんですね。これが空中に浮いて見えるということは、実は私どもが臨終を迎えて、本当にお父さんお母さんが息を引き取るという時に、少しでも、もうちょっとでも生き延びてほしいという気持ちになると思います。

ですから私が最初に申し上げた、ハンセン病のお子さんが一生懸命お祈りしているということの答はですね、実は動いてほしい。動かなくなるのではなくて、いつまでも動いていきたい、そういうことだと思いますね。だから歩き通して、残念ながら亡くなりましたけれどもね、未だに私は生きて動いているのではないかなというふうに思います。その子どもさんの顔っていうのは今でも忘れませんね。そんな時暗闇の中でちらっと見ただけです。だけど眼光がね、すごかった。小さい子なのに、一点を見つめてじ〜と。それが夜中じゅうですよ、お人形さんみたいになってじ〜としていてるんです。そういう遍路者というのは今まで見た事がなかった。ですからその病気を治してやりたいんだけど、結局意に叶わなかったことになるんですよ。だけどそれには色んな思いがこもっている、色んなメッセージが込められているんですね。だから、治るんですね。僕は治らないということを使ったんだけど、治るんですよ。治るんですけども、結果ではないんですね。まあ、人間の人生というのはそういうもんじゃないかなと思うんです。

おわりに

まあそういう意味で、四国遍路というのは色々なドラマがありまして、不肖私などは本当に納経所にしょっちゅう座っているわけではないんです。その心も、垣間見る程度なんですけども、こんなことを常々思いながら遍路の方々を迎えているわけでございます。どうかこれからも四国遍路、四国の霊場寺院もまた世界遺産というものを目指しております。内田先生も良くご存知ですけども、今ランク付けはですね、登録の一步手前の「非常に有意義な所産である」それから「希有な文化遺産である」という評価をいただいております。いかにして中身を、世界の委員の先生方を納得させるように構築していくかということで、四県で切磋琢磨して色々努力を続けているわけですが、一気に八十八ヶ所のお寺の住職さん方の理解を得、満足するようにしていくのはどうにも大変で、私も苦勞しております。しかしそれは霊場会や、八十八ヶ所の悲願でございますので、どうか皆様のご支援をいただけますようよろしくお願いいたします。長いことご清聴ありがとうございました。

